

至る新しき人を着たのである。そこには、もはやギリシヤ人とユダヤ人、割礼と無割礼、未開の人、スクテヤ人、奴隸、自由人の差別はない。キリストがすべてであり、すべてのもののうちにいますのである。」

今日はからずも水戸へ参りまして、この集会へ出席させて頂き、靈の糧をたくさん恵まれたことを、心から感謝いたします。靈の糧の力は、限らないものでありますから、頂いた教えを、十分消化するように、許されますれば帰りましてから祈らせて頂きたいと思えます。

先程御一人御一人紹介して頂きましたが、私の方から何も申し上げておりませんので心苦しく思います。

そこで、御挨拶をかねて、私がここに参りましたいきさつなどについて申し上げたいと思えます。

まず日韓の関係についてであります。政治的なきさつについては、私の不得手とするところでありまして、その任でもございませぬ。またそうした場合、大がいに韓国が正しかったのだという前提に立たせられるので困ります。私は、一つの固められた立場に立つてものを語るのではなく、どこまでも、良心に恥じない真実に立つて語りたいたいと思えます。

こちらに来て三ヶ月経ちました。この間に一番強く学ばせられていることは、日本に対して、韓国が比較的正しかった、ということが、全然成り立たないということでありませぬ。これは、私皆様の前で御機嫌とりにいうのではありませぬ。またここで何を言っても迫害にあうことがないからいうのでもありません。私は神さまの前に立たせられて、このことは、真真正正しいと思うのであります。

聖書は隣人愛について教えておりますが、それはただ相手の誤りを赦すことで十分でしょうか。わたしにはどうしてもそう思えない。一体、他人の誤りを赦すことが人間にできるだろうかと思うのです。

「主の祈り」の中で問題になるのは、私の罪であつて、私たちは、これを神さまから赦して頂いて、始めて隣人を赦す力も与えられるものと思えます。

これは、個人の問題であると共に、民族についても同じことはいえると思うのです。この意味で、神さまの前に立つ時、韓国は正しかった、ということはいえないと思うのです。

金教臣先生の「聖書朝鮮」にある話ですけれど、こういう話があります。

「静岡県にある米屋さんがあった。朝鮮人の中で、この米屋さんから米を買っていた者がある。そういう者が、二、三ヶ月分の米代を未払いのまゝどこかへ転居してしまう。それが一人ではない。二人も、三人もそういうことをする。けれども米屋さんは、それをいつも赦していた。」

金先生は、このことについて、こう申されました。

「この米の一つ一つを完全に返済するまで、私たちの罪は赦されない」と・・・・・・・・。

もう一つは、私の友人であります佐藤さんの引揚げ時の話です。この人は長い間朝鮮におった方ですが、ほんとうに着のみ着のまま帰って来られた。

引き上げられる時、大田という町（それは今私の住んでいる町です）の収容所で半日程待たせられたそうです。その時、韓国の運送会社が荷物の運送を引き受け、荷物にそえて運賃までとつたそうですが、その後二十年、一こうに荷物の行き先は分らないというのであります。終戦直後のどさくさまぎれとはいえ、私たちはこのように不信実な民であります。私共はこういう人の話を聞きますと、それをよそ事として考えることが出来ない。非常に恥かしい思い、そして激しく負い目を感じます。それにこういうこ

とを数え上げだしたらきりがありません。それよりも、もつと大きな負目は、教育です。韓国の教育は、排日教育です。日本が敗けた日から、排日教育をやっている。うらみがあつたにしてもその日からすっかりなくすべきであつたのに、京城には、抗日運動をした人たちの銅像がいっぱいあります。憲法の序説も排日から書きだしている。今回の国交正常化で、政府は急に排日教育を訂正しようとしています。

つい最近の朝日新聞の夕刊に、韓国への深い同情の記事が掲載されておりました。その論説はそれなりに十分意味を持っていると思います。しかし、そこにでてくる韓国人々の対日感情をそのまま当然のこととして受取ることに、私は必ずしも同調することができません。隣人を愛し、隣国を愛するのではありません。ほんとうに正しい愛国の態度とはいえないのではないかと。

これは、キリストを知らない人にはいくらいつても通じないことですが、エレミヤのように、迫害されながら、愛する故のたたかいをたたかわざるを得ないと思うのです。そこに私たちのつきない祈りがあります。

韓国の無教会について

ほかの人のことはともかく、私のことを申しますと盧平久先生の雑誌や日本の無教会の先生方の雑誌を読ませて頂き、小さな家庭集会を持つようになりました。昨年、政池先生が韓国において、私が先生のご講演の通訳をしたことなどが機縁となりまして、日本へ来らせて頂くことになりました。

韓国には、教会がたくさんあります。多分日本よりも多いかも知れません。李承晩氏も教会員でした。しかし、教会信仰が底が浅いものであることは、その実である行為を見ればわかります。勿論韓国で無教会だけが、底の深いものであると、自負する心は毛頭ありません。私たちはみな、神の前に虫けらにすぎない者であります。そして韓国の教会のおちどを、そのまま私たちの、私の責任として痛感するものであります。

内村先生が説かれたのは純粋な福音であったと信じます。金教臣先生も内村先生も共に愛国者でした。お二人共、真の愛国者でありました。韓国の兄弟姉妹たちは、このことを強く学んでいきます。内村先生から、ムキョウカイを除いてもなお残るものがあります。それが愛国心と福音であると信じます。私たちはそれを学びます。金先生もそれを強く教えられました。

今度、私が日本へまいりますときに、兄弟姉妹たちの激励の言葉は、「純粋の福音を学んで来い」ということであります。私たちは、それがなければ韓国は立てないと思っています。

今日、こちらへ参りまして、あたたかい友情に接し、心から感謝しております。ただ私は、こちらの形式をそのまま真似ることは出来ないと思います。しかし、純粋の福音を受けることは出来ると思います。今朝、こちらへ来ながら、吉原先生が仰言った「純福音が日本人の血を潔める」そのように、韓国人の血を潔めて欲しいと切に希みます。

最近韓国では、キリスト教の土着化ということがさかんに聞かれます。しかし、韓国へ福音が伝えられてから何十年も経た今日において、今さらキリスト教の土着化をいうのはおかしい、それ程韓国ではキリスト教が韓国人の血となり、肉となっていないことが分り出したわけです。

私たちは、金先生が教えられたように、キリスト教を消化したい。

極端なことをいうようですが、金先生の、お書きになったことばの中に次のような意味のことばがあります。内村鑑三の戦った戦からも、ルターの抗争からも、パウロの弁論からも離

れ、それと全く無関係であつてもよい。ほんとうにキリストのみにつながる必要があるというのであります。その時、始めて、真のキリストによる一致ができる。それが真の無教会であると私どもは信じます。

たしかに日本のムキョウカイは正しく立派でしょう。しかし、それをただ形の面だけで真似て、寄生虫のような存在であつてはならないと思います。それは韓国を益するどころか、甚だしい損失だと思ひます。先日鶴田先生にそのことをお話いたしましたら、「そうだ」と仰言つておられました。

昨年六月、日韓問題で昂奮している京城（ソウル）で、盧先生は、「内村鑑三先生の生涯と信仰」と題して、堂々と講演をされました。真の福音は、人間を大胆にします。形だけ真似たのは、ほんとうの勇氣は出ない、従つてほんとうの独立もないと信じます。

新田先生と政池先生が韓国へおいでになつて、日本人として公式に、韓国人の前に謝罪のことは申されました。それは実に私たちの肺腑に迫るお言葉でした。政池先生も新田先生も無教会の先生方であつたということは、偶然でないと思ひます。私はお二人の先生の背後に日本の教友の皆さんのお祈りが天使の翼となつ

て守護していたことをまざまざと見るようにすら感じたものであります。

無教会の生命とするところは、独立であり、自由であると思ひます。それから当然、多様性が出てまいります。この多様性に一致を与えるものは、キリストの十字架であると思ひます。それが主にある愛となり、寛容となり、赦し赦されることとなると思ひます。マタイ伝七章十二節のことは「何ごとでも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとうりにせよ」の通りです。

私は、政池先生がそしてその前に新田教授が、まっさきに韓国に飛んできて下さつたことの中にそのような愛を感じ受けるものであります。

私が今度日本に参ります時に、或人が止めに参りました。「日本に行つてはいけない」というのです。「韓国は、日本の隷属から脱して、ようやく独立したんだから今一番大切なことは、主体性を持つことだ。そのためには、アメリカやイギリスへ行つて実力をつけ、それから日本と相対すべきだ。」というのです。そこで私は申しました。「盧先生も仰言るように、韓国はたしかに真の独立を打ち立てなくてはならぬ。そのためには、真の独立を学ぶ必要がある。その独立を内村先生の信仰から学んでくること

だ”それが私の目的である。」そういつて、私は日本へやって参りました。

韓国にとつて、韓国の内村といつてよい金教臣先生は、終戦直前に亡くなられました。しかし、金先生が基礎工事をして下さつた。先生が韓国の眞の独立の基をすえて下さつたと私は思いません。

それから二十年たちましたので、少しは事情も變つて来たかも知れません。しかし、いかに外側の事情が變つたにせよ。金先生のすえられた独立の基礎石は動かしてはなりません。その上に独立の家を作ることが、私たちに課された大きな責任であると思うのであります。その基礎石は、とりもなおさずキリストの十字架であります。

劉先生紹介

先生は韓国忠南大学校の教授の職にあられ、昨年十月、ヘブライ語の研究のため来日されました。勉学の場所は主として国際キリスト教大学、来日の動機についてはお話の内容にあるとうり、純福音主義のキリスト教に接し、韓国によりよき独立に寄与するため、引いては、日韓両国民の眞のかけ橋たらんとされること。

一月九日、わざわざ水戸の小さな集會に御出席下さつた。御滞在は、先生御自身の御言葉によると「許されれば、今後一年位（当初は、今年三月までの予定）」とのこと。

なお水戸とのつながりは、矢内原先生に学ばれ、吉原兄と親しい鄭卓植兄の紹介です。

本稿は半田が拙い筆記をしたものを、劉先生にお赦しを得て掲載いたしました。従つて、文責は半田にあります。

梅花にさきがけて

吉原賢二

劉先生、九日の日曜日、東京でのお忙しい御勉学の時間を割かれまして、私どもの敬愛する鄭卓植兄とともにわざわざ水戸にお越し下さいましたことをあつくあつく御礼申し上げます。

韓国は私どもにとりましては今までは実感として近くて遠い国でありました。三十六年間植民地としての苦しみをなめられた韓国の方々に対しまして、私どもが一言もお詫びをする機会もないまま、二十年の年月が過ぎてしまいましたために、私どもはいつの間にか自分たちの罪を忘れ去ろうとしている自分自身を見出し

て、非常な驚きと自責の念を持ったのであります。劉先生の言葉

のうちに、われわれ日本に居て安穩無事な暮しをしている者には想像もできないような、いわば韓国の傷みをいくらかでも教えていただいたような気がいたしました。劉先生は淡々としてありのままの話をされ、私どもにさえ感謝をされてゆかれましたが、私どもは非常に恥かしい気がいたしました。

心から嬉しく思つたのは、日本海の荒波をこえて渡つて来られた先生を、春を待ち望む偕楽園の梅林に御案内でき、また先生にとつてははじめてという太平洋の波打ちわまでお供することができたことであります。

自主独立なるものの同志的結合と申しますか、キリストによつて永遠の罪の縄目から解き放たれ、み国のために働く志を立てたものには、民族の差別も人種の差別もないことを実感いたしました。私どもの集会に旧知のように加わっていただき、あのようにな貴重なお話をいただきましてご教示下さいましたことを感謝いたします。主にあつてこの交りが末長く続けられますように心からお願いするものであります。

故郷朝鮮のこと

小野麗子

私の出生地は朝鮮忠清南道公州邑常盤町二百二番地、父は教員として彼の地に渡つていたのでその名も「高麗」に因み「麗子」とつけられた。父の教職の場は禮山、公州、咸興と変移し、最後に北青の地で終戦を迎えることになりました。日本人は一瞬にして、かつての官憲は皆捕えられる等受くべき報いを被むることになった。父は日雇人夫として斧を担い薪割に出かける身になった。父の働きは家族の食糧に変えるには余りにも少く、母と三人の子供達は近隣の人々の助けによつて軽うじて生活を支えられたのだつた。助けたとて何の益にもならないかも知れないのに。心ある朝鮮人の方々は敗戦国民にすぎないひ弱な婦女子に対して無条件の援助を与えてくれました。

当時未だ学令以前だつた私には、殆んどろ覚えにしかないのだが休暇などに機会ある毎に語られる母の生々しい思い出話によつて、いつの間にか深く私の心の中に植えつけられている。まして、母にとっては単なる思い出話以上のものとなつてまさに「生きる力」の源となつている。この二十年来、めまぐるしい生活の場にあつて母は「死すべき生命と思つて生きて来た」と語り

つつ、その感謝を、在鮮中の終戦直後の体験記として私たちに書き残して下さるとのことである。

私の記憶が不正確の故に今ここに多くを記し得ないので上の事柄に関連して感想を述べてみたい。私は大陸朝鮮生れであることを漠然と誇りに思っていた。六歳にして逃れ出た「ふるさと」への郷愁は年経る毎に強まり、過去と現実の情勢も深く知らぬままに頻りに脳裏を去来して止まなかった。

しかし、今や神様のご経綸により恰も夜の夢の解き明しのように、私の前にその意味が示されつつあります。

日本国と日本人民がいにしえの母国である朝鮮に対して過去において行つて来たことへの根本的反省の時がきつつあると思う。

劉先生のお話に耳を傾けつつ一瞬私の脳裏をかすめた思いは、「私の父も何か悪いことをしてきたのではないか」というそれまで他人事のように日本人の悪しきを責めていたのが最も身近なところから私事として自分自身にかえってくるのを痛感した。即ち、キリスト者の連帯責任の意味が一層明らかにされた。

その後、折りあつて父に尋ねたてみたところ「父は日本人学校で教えたのだから・・・」と云われた。形の上では納得したもののやはり少しの疑問があった。父上は自らと家族の生活のこ

みを考えて悪しきこともしなかった代りに、その逆もなくそして一人の友人を得ることもなく逃げるようにして、文字通り引上げてきたという事実でした。

次に母のことに言及すると、家庭内にあつて育児と家事に明け暮れていた母は終戦以前に既に精神的な感覚によつて、日本の敗北を悟り、頻りに早期内地帰還をすすめ、望んだようでありました。しかし、神様のなさることは人の思いをはるかに超えて高くあられます。一家は終戦に次ぐ苦しい生活、食糧難と弟（乳児）の入院その上父の收容所行きも加わつた。全ては母の手一つにゆだねられ多くの危険の中にあつてか弱い腕をもつてしては何も出来なくなつてしまつたとき、この世に対して死んだつもりになつたことと思う。ついには日本人の支配が無力となつたとき政治経済的に外的なものによつて、支えらるべき何物も失われた時、実に「力」ならぬ「心」によつて支えられることになった。朝鮮人のクリスチャンのお医者さん、人目をしのぶ田舎の娘さん、一面識で母を信頼した青年、そして心からの友人の応援によつてその一人の生命も失うことなく無事帰還することが出来ました。

母の受けた真の親切と愛は本当に国を超え利害を問わぬ尊いものでありました。このことを生涯忘すれず、否、永遠のものとする

ることが母の念願であり、同時に私たちに課せられた課題であると思っております。具体的には、国交も回復したのでいつか母と共に朝鮮海峡を渡り古き親しかりし友人と会わせてあげるのが、ささやかな、しかし大きな夢であります。ただし、そのお方の消息は未だ知る由もないまま現在に至っておりますが。そして最後に、国境を超えた人間同志の愛の交わりが、イエスキリストの十字架と罪の赦しの福音によって、より完全なものとなり、正常な国と国との交流が回復されて真の平和がこの地上にも、もたらされることを祈り願うものです。

韓国と日本

小貫武寿

去る一月九日の集會に、突然韓国忠南大学の劉先生が、東京でうかい書店をやって居られる鄭さんと一緒に出席された。

非常に温厚な方で、流暢な日本語で静かに話をして下さった。

先生はいろいろな話をされたけれども、その中でも、「韓国の大部分の人は、韓国には罪はない、みんな日本人が悪いんだ。」と思っっているが、本当に神の前に立った時、韓国人も決して罪が

ないと云うことは出来ない。韓国人こそ日本人にあやまらなければならぬのだ。」と云うことをおっしゃられた。

私は此の言葉が胸にじんと来た。これが日本人が云った場合は、その通りだとうなずくだけであろうが、目の前で、立派な大学の先生である劉先生にハッキリと云われると何とも云い様のない感動を覚える。私も実は土地のことで在日の朝鮮の人（韓国か北鮮か判らない）からにがい目に遭っているが、異邦人はお互いに気が許せないから、することが少々常識はづれたことにもなるのかも知れない。やはり人の子であるから、心から和解する努力をして行かなければいけないのだ、としみじみ思ったのである。

一頃新聞等で日韓条約問題で大騒ぎをしていたが、此の頃はすっかり忘れられた様に静かである。

しかし日韓条約で何がしかの賠償をしたからと云って、過去何百年にわたって日本人が侵略した罪と云うものはそう簡単に拭い去ることは出来ないだろう。

時間は永くかかっても、日本人は地道な努力をして今迄の罪のつぐないをつけて行くべきだ。それは韓国の人達一人一人に日本人が心から感謝されるようになる迄である。

イエス様は「汝の隣人を愛すべし」と云われた。まことに真理である。あたり前のことなのだが、これが出来ないのが人の常であり、大抵は隣近所、同業者と云うものは仲がよくない。

日韓関係も、早くお隣同志、心から一人一人が愛し合うようになりたいものだ。

そして、それには神の前に一人でも多く罪を悔改めることが必要である。

後記

○一月九日、韓国忠南大学の劉熙世教授と、東京で書店を経営されている鄭卓植兄を迎えて、今年初の集会を例月どおり、水戸幼稚園の一室で開くことができた。

当日は、第二日曜なので、桜井五郎兄のロマ書の講解があり、午前の集会を一まず終わった。そのあと、ささやかな昼食を共にし、午后、自己紹介と懇談を行なった。

「劉先生紹介」のところでもふれたが、教授のお話し下さった内容は、もつと豊富多岐に亘ったと思う。にもかかわらず、私の拙い記録のまま、ここに掲載させて頂くのは、先生には、大いに御迷惑であろうと思う。私の我がままな申し出でを御承諾下さった先生に、心からの感謝と共に、この拙い筆記が、先生の真意からあるいは外れるところがあるのではないかと、ひそかに恐れ、かつ責任を痛感する。どうか、諸兄姉が、キリストにある愛心を

もつて、教授の主にある愛と勇気を、補足味読下さるよう切に祈ります。

○連続して起きた空の大惨事は、人間文化の悪い象徴を、まざまざと見る思いがする。インドでは食糧の暴動が起きているという。我ら今何をなすべきか、ベトナム問題はまた私たちの心の問題でもあるのだと思う。人間の手によって、バベルの塔を完成し、ノアの洪水をせき止めることが出来るのであろうか。

(半田)

日曜聖書集案内

第一日曜

第二日曜 ロマ人への手紙研究 桜井

第三、第五日曜

以上水戸幼稚園十一時より

第四日曜 南町二丁目商店会館、十時半より

聖書・讚美歌持参 参加自由

水戸無教会第五十四号

編集人・印刷人

発行人

昭和四十一年三月発行

発行所 水戸市東原町水戸幼稚園内

水戸無教会

(実費十二円 十十円)

半田梅雄

松本文助